

# 転成文末詞「ニ(ニー)」について

佐藤虎男

## はじめに

三重県下、伊勢を中心に、「ねえ」相当の単純感声文末詞「ニー」とは大きくちがう転成文末詞の「ニ(ニー)」が、

○マダ オンノヤ ニ。ウザコイ。

まだいるのよ。うるさいったら。(中女↓同) 「江島町」とか、

○イコ ニー。ハヨ。ハー。

行こうや。早く。なあ。(中男↓兄) 「江島町」

とかいうように、よくおこなわれている。

本稿では、この文末詞をとりあげて、左のような目次のもとに記述しようと思う。

- (一) 三重県鈴鹿市江島町方言における「ニ(ニー)」の生感
- (二) 「ニ(ニー)」のおこなわれる地域
- (三) 出自について

## (一) 三重県鈴鹿市江島町方言における「ニ(ニー)」の生感

鈴鹿市は、いわゆる北勢の南部に位置する。同市江島町は、伊勢

湾にのぞむ、農・商業を主とする集落である。(旧白子町大字江島) いま、伊勢の代表地として当地を選び、そこでの使用の実際を記述することは、伊勢およびその周辺におこなわれる当該文末詞のありさまをうかがい知るのに有効であろう。そこで、まずは、当地における転成文末詞「ニ(ニー)」の生感を記述することとしよう。

### 1. 意味用法

#### a 単独形の場合

(1) 告知の表現を仕立てる「ニ(ニー)」その一  
相手がよく知らないこと、気づかないことなどについて告知知らせる、下記のようなのを、まずとりあげることができる。以下にこれをややこまかく分類して述べるので、用例は、原則としてそれぞれ一例をあげるにとどめる。

○アンマリヤ ニー。ヤメトキー。

あんまりだわよ。やめておきなさい。(青女↓妹)

これは命令表現と連文をなしている。

○イー ラチアケン ニ。キー ツケナ。

胃をこわしてしまいますよ。気をつけないと。(初老女↓夫)

これも一種の命令表現(「ナハねば」の現われる文)と連文をなし

ている。

○イヤ。ナナゴローモ アツタニ。

いいや。七合目も(雪が)あつたよ。(老男)

これは、問いに対する指示で、応答辞と連文をなしている。

○オーイ。モー ヒチジハンヤ ニー。

おうい。もう七時半だよ。(老男↓嫁)

これは、呼びかけて告げる場合で、よびかけことばと連文をなしている。

○ドージャ。コンナ コト スン ニー。

どう？(これごらん。)こんなことするよ。(小女↓姉)▲妹

のいたずらを告げ訴える。▽

これは、相手の反応をたしかめるように告げるもので、問いの表現と連文をなしている。

さらに、

○ミテクレワ エーケドモ スグ ヤブレマス ニ。

外見はいいけれども、すぐに破れますよ。(中男↓中女)

は、裏面の真実を告げるもの(ケドに注目)であり、

○ゴノゴロワ リニコーリニユコーガ アルデ ハヤサズ コーテ

モ アカヘン ニ。

最近は流行流行があるから、はやまって買ってもだめだよ。

(初老女)

○クレクレ ユーテ シヨナイ ニー。

くれ、くれと言って、しかたがないのよ。(中女↓初老男)

これらは、理由を示して告げ教えるもの(デ・ーテに注目)である。

「ニ(ニー)」が用いられている文表現は、以上のように、その文あるいは連文のうえに、いかにも告知の表現であることを顕示するような表現法上の徴標を、それと指摘しうる場合が多いのであるが、そのような徴標の見いだしがたい場合も、そのほとんどが、たとえば、

○ワヤク センヤ ニー。

いたずらするんじゃないよ。(初老女↓幼男)

○ヒゾコナイ スル ニ。

失敗するわよ。(青女↓母)

○ボカーント シトツタラ アカン ニー。カジン ナル ニー。

ばかんとしていたらだめだよ。火事になるわよ。(青女↓妹)

のように、抑制したり、注意を促したりする場合にあらわれるのである。表現内容(素材)上そういう一定の傾向を示しがちなのである。自然傍受によるとき、否定的な意味の「アカン」「アカヘン」を「ニ(ニー)」が受けて立つ表現のかなり多く得られるということもまた、ここに注意されよう。

こうして、告知は、くわしくは指示であり、注意喚起であり、抑止であり、表示である。いまは、これらのすべてを「告知」と呼ぶのである。

幼女が荷物を持ちあげようとするとき、その親が、

○オボタイ ニ。重いよ。

と言う。「ニ」文末詞によって、この文は、きれいに告知の表現に仕立てられている。

○マド アケテ ネットノヤ ニ。

窓をあけて寝ているのよ。(青女↓母)

でも、事実を告げ知らせようとする意図は、——そういう注意喚起の意図は、この文末詞にあきらかなのである。(もしも、ここが「ナー」でもあれば、告知の表現ではなくて、相手とともに事実を認めあうものいいとなる。)

以上を、あらためて統一的に観察するとき、これらの表現には、一般に、「注意せよ」「そう信ぜよ」というような内容の文が連なることを想わしめる傾向のあることに気づく。つまり、いわば隠在の命令(ないし禁止)表現を連文のかたちで想定せしめる傾向がある。これが、告知の「ニ(ニー)」「文末詞の特質であろう。そういう観点からすれば、この項の初めに掲げた、命令表現を伴う場合のもの——「アンマリヤ ニー。ヤメトキー。」など——は、それが顕在している点で、告知の「ニ」文末詞の一典型と見ることができようか。

この点は、次の、告知その二でもほぼ似た趣にある。

(2) 告知の表現を仕立てる「ニ(ニー)」その二

前述の類は、すべて、上接述部が終止形でとじられている場合であった。告知の「ニ(ニー)」は、さらに次のように、未来形述部を受けて、意志あるいは推量の表現に生かされる場合もある。

○カシナ。ワシガ シタンシヨ ニ。

こちらへ貸してごらん。わたしがしてあげましょ。(老女↓青

女)

○ウエイ ノッタラ カワイソヤケド ノッタロ ニー。

上に乗ったらかわいそうだけど、乗ってやろう。(小女↓妹)

これらは意志の表現に生かされている。

○オー オー。イタアスヤロ ニー。

おうおう。痛いでしょうに。(初老女↓中女)

これは推量の表現に生かされている。後者のような「ニー」は、主として老年層で用いる。

前述の告知その一と、このその二とは、前者その一のものゝ事実を告げるゝのに対して、後者その二のものが「意志や推量を告げる」という対比関係をなす。告げ知らせるという機能は両者に共通しているが、相手への迫りかた、訴えの度合は、前者その一の方がより強いとされよう。

(3) 勧誘表現を仕立てる「ニ(ニー)」

「ニ(ニー)」が未来形述部を受けて立つときは、相手を促して、ともに行為しようとする誘いの表現をも仕立てる。

○ナー。ナットゾ シヨ ニー。

ねえ。なんとかしましうよ。(老女↓中男)

○トーチャン。マハコト ヒトツーツ ノモ ニ。

父ちゃん。まさ子と一つずつ飲みましようよ。(小女↓父)

○ヨバレヨ ニ。マー ヒトツ。

ごちそうになりましようよ。まあ一つ。(初老男↓同衆)

誘いであるから、しげんに相手を促すことばを伴うことが多い。上例では、「ナー」「トーチャン」がそれである。第三例によびかけことばが見られないのは、場面に依存しているためであろう。

(4) 反撥表現を仕立てる「ニ(ニー)」

このように言いうる下記のような場合がある。

○ナニガ イケヨ ニ。トイネヤゾ。

どうして行けるものか。遠いんだぞ。(中男↓青男)

未来形述部を受けている点では、前項のと同じであるが、本項の

「ニ(ニー)」は、そのうえに「ナニガ」との呼応をなすのが特色である。この表現は、中年以上におこなわれる。古風で、品位は高くない。

b 複合形の場合

転成文末詞「ニ」は、次のような複合文末詞を生成している。

「ンナ」

○ツイゾ レーイーニ キタ コトガ ナイヤガ、エライ ヒト  
ヤンナ。

ついに一度も礼を言いに来たことがないのだが、(とにかく)

たいしたやりてだよ。(老男↓老女)

○イケマス ンナ。コンナグライナラ。

行きますよな。これぐらいなら。(中男↓同)

告知の「ニ」と単純感声文末詞「ナ」との複合である。

△ウチト イッショニ イコ ンナ。

わたしといっしょに行こうよな。

これは、勧誘の「ニ」と単純感声の「ナ」との複合である。

どちらも複合して「ンナ」となるのがふつうであるが、「ニナ」と実現することもないではない。

「ナ」が複合することによって、いっそう親密な訴えかけとしてよく定まる。「ナ」がいちばん盛んな文末詞であるだけに、うちとけた感じが出て、安定するのである。「ンナ」は、おもに中年以上の、特に男子によくおこなわれる。

「ンノ」

○モ コイデ ヤメヨ ンノ。

もうこれでやめような。(小男↓小男たち)

これは勧誘の「ニ」と単純感声の「ノ」との複合である。「ノ」は勧誘の「ニ」とは複合するが、告知の「ニ」とは複合しない。(主として男子におこなわれ、稀に老女層にも聞かれることがある。その場合は、特に下品な感じが伴う。)

「ニサー」

○ンナ コト エワント マーイコ ニサー。ンナー イヤヤ  
ワナー。

そんなこと言わずに行こうや。そんなのいやだよな。

(中男↓兄)

準感声の文末詞「サ」との複合である。「サ」は、相手をこちらに向けさせるはたらきのいちじるしい、注意喚起の文末詞として、これもまた盛んにおこなわれている。

2. 「ニー」の用いられている文の文末声調

上掲諸例にも見られるとおり、告知の「ニ(ニー)」にあっては、ほとんどの型の声調にもせられて実現する。ただひとつ、「ニ」の型が存しないのは、察するに、「アノ ナー」のような「ナー」文末詞(もっとも盛んな文末詞)の代表的な声調と衝突することを避けようとするためであろう。

表現効果を言うならば、当文末詞がしりあがり調にまとめられると、しりさがり調の場合よりも一般に訴えかけは強いと見られる。

次に、「ニ(ニー)」が未来形述部を受ける勧誘・告知の表現にあっては、その文末詞部分がきまって低音部位に立つ。ここで高まることは、まずない。

### 3. 使用者層と品位と頻度

上掲諸例で特に注記するところのないものは、どの年層にもおこなわれるものである。男女とも用いるが、どちらかといえば女子に多い。男子が用いると、一般にやさしいものいかに感じられるのである。(これは「ニ」の音感によることでもあろう。)品位は、これも特にことわらないものは、中程度以上と評される。

総じて頻度高く、とりわけ親しい間がらによくおこなわれる。よそびとに対して用いることは少ない。

#### (二) 「ニ(ニー)」のおこなわれる地域

右のような文末詞は、見広げていって、どういう地域におこなわれているのであろうか。このことに関する筆者の調査はきわめて不十分であって、さらに調査の密度を高めねばならないのであるが、ここに、現段階での調査結果の大略を述べて、ご教示を仰ぐこととする。

三重県域から見ている。

まず、伊勢では、北・中・南勢とも広くおこなわれるようである。各地の用いさまは、必ずしも一様ではないであらうが、告知や勧誘といった主要用法は、伊勢ではまずそろっていると思われる。ここに伊勢各地の用例を掲げることが、いっさい割愛する。

次に伊賀はどうか。

藤原与一先生が名張市流之原部落の「ニー」の例を示していられる。

○チョットダケ フコ ニー。

ちよっとだけふこうよ。(老女↓孫入男V)

○マー カッコンデ イコ ニー。

まあ、いそいでたべて(かきこんで)行こうよ。

△「方言学」一五六頁・一六八頁

これらは、勧誘表現を仕立てる「ニー」である。

阿山郡下の壬生野部落での、

○ジュツカイ ショー ニー。

十回しようよ。(小男↓同)

もまた、勧誘の「ニー」である。

同郡大山田村中馬野での、

○「エーガ ミヨニ」テ ユイモツテ サナー。

「映画見ようよ。」と言いながらすねえ。(初老女↓青男)

○ミンナー オトシヨリワ コノ ダイショニ ウマレタ シトバ

ツカデス ニ。

みんなおとしよりはこのいなか生まれの人ばかりですよ。

(老女)

は、前の例が勧誘の、後の例が告知の「ニ」である。

同じ大山田村の、阿波地区の「ニ」について、中野喜代一氏は次のように報告しておられる。

共通語の「よ」または「よ、ねえ」といった時に用いる。すなわち、ある動作を促す場合に用いる。

(例) はよいのニ。(早く帰ろうよ。)

もっと遊ばニ。(もっと遊ぼうよ。)

もっと早歩こニさ。(早く歩こうよ。)

つぎの例のように形容詞の終止形に接続して用いるのは、伊勢方言の侵入によるものである。もちろんアクセントもちがっている。

(例) とても美しいニ。(美しいよ。)  
この本新しいニ。(新しいよ。)

△以上抄出▽

告知の「ニ」が伊勢からの侵入によるか否かは、なお検討を要すると思うのであるが、ともかく「ニ」の主たる用法が勧誘にあるという指摘は注目すべきである。筆者の調査体験からしても、伊賀において告知の「ニ」を聞くことは少ないようである。

伊賀上野市では、

△オイデ。イッショニ イコ ニ。

のような勧誘の「ニ」は、男女の別なくほとんど全年層におこなわれるが、「読ンドル ニー。」のごとき「ニ」は伊勢ことばであった、ここでは言わないという。

とは言え、現に大山田村中馬野部落で告知の「ニ」を聞き、また、滋賀県境に近い丸柱部落でも、

△イテ キタンヤ ンナ。

行ってきたんだよ。△「ンナ」は「ニナ」と解される。▽

というような「ンナ」を聞き得ていて、伊賀周辺部には、なおなにがしかの告知の「ニ」の認められることも無視してなるまい。

伊賀の状況は以上のようなのであるが、因みにここに伊賀に近い滋賀県下の状況を見ておこう。

甲賀郡信楽町では、勧誘の「イコ ニー。」はおこなわれるが、告知の「ニ」、「アルニー。」のようなのはおこなわれないという。

蒲生郡日野町でも、

△イコー ニ。△中女作例▽

という勧誘の「ニ」がある。

かけひもとき氏には次のような記述がある。

ニーは甲賀の伊賀に隣接している地区でつかわれ、相手の同意をもとめ、さらに勧誘する場合、その他につかわれる。

行こニー。 どうしようニー。

(「近畿方言の総合的研究」二二二頁)

滋賀県全域の状況は全く白紙の状態であるが、前記かけひ氏の記事からすれば、県全域にまで見ひろげることができないのではなからうか。いまは不明というほかない。

ついでに奈良県の状況を見る。

伊賀名張に近い山辺郡都祁村に「ニ」のあることは、「全国方言資料」(日本放送協会編)近畿編に、

○ンマニ ソヤニー ほんとにそうですよ。

○ハー ウツクシノ ツエト ホシタルヤ ローニ

はあ、きれいなのをずらっと干してあるだるうに。

とあることで知られる。勧誘の「ニ」も、

△イコ ニー。 △イコ ニサ。

のように、とくに中年の女性によくおこなわれる。

すこし南へ下って、南勢一志郡に隣る宇陀郡御杖村神末では、

○イセ イタラ ソラ ウツクシー コトバ デスンヤ ンナ。

伊勢へ行ったら、それはきれいなことばなんですよ(あんな)。

(老男)  
のような告知の「ニ」がよく聞かれ、また勧誘の「ニ」もおこなわれる。

これが三重県寄りの状況であるが、奈良県中央部に入っても「ニ」

がたどられるであろうか。吉野郡吉野町には、もう告知・勧誘いずれの「ニ」も存しないようである。すべて今後の調査にまたねばならない。

以上が、伊勢・伊賀およびその西側隣接地域の概況である。再び三重県下にもどって、志摩を見る。

志摩郡安児町安乗では、

○ハシリヤイ シヨヤ オレゲ ハダシカニ ナルニ。

走りくらべしようや。ぼくははだしになるよ。(小男↓同)

○イコニ。ヨ。

行こうや。なあ。(初老男↓幼男)

のように、告知も勧誘も聞かれる。

同町の、アゴ湾にのぞむ神明部落では、

△オイ。イコニ。

のような勧誘の「ニ」があり、

△イッタニ。

のような告知の「ニ」もある。後者のような「ニ」は、女子に多く、やわらかい感じが伴うようである。

大王町波切では、

○メズラシカリヨッタニ。

珍しかったものですよ。(中女↓同)

のような告知の「ニ」はある。勧誘の「ニ」もあろうか。

アゴ湾を抱く前島半島の先端、志摩町御座での状況を、友人馬杉宗伸氏は次のように教示された。

「イクニ。」のようにこちらから自発的に言うことはないが、人から聞かれて、「アノヒトイクニ。」と言うことはあ

る。「イクンナー。」ともよく言う。

また、こちらから誘うときに「イコニ。」という言いかたはないが、「イコージャンカイ。」と誘われて、「ンナイコニ。(じゃ行こうよ。)」とは言う。

右によれば、その使用になにほどの特色があるようであるが、ともかく当面の告知・勧誘の「ニ」がそろっておこなわれると見られる。筆者は

○ジジャー オコテクニニ。

じいさんが怒ってくるよ。(初老男↓中女)

という告知の「ニ」をここで聞いている。

さらに浜島町南張でも、告知の「ニ」のおこなわれるさまが、「全国方言資料」にあきらかである。左にその一例を引く。

○タノモーニ マー。ンナラ

頼みますよ。まあでは。(老女↓老男)

以上で志摩を終り、次は紀伊領域の熊野灘沿岸について見よう。

ここでは、北牟婁郡長島町、海山町、尾鷲市、熊野市など、いずれも「ニ(ニー)」文末詞のあきらかな使用は認められず、土地人もまた言わないと答える。

ただ、尾鷲市内では、たとえば、

△アブナインヤンナ。(または「ジャンナ。)

危いんだよ。危いよ。

のような「ヤンナ」を、おもに女性が、子供をやさしくさとすようなときに言うという。

△ソレ アシノヤンナ。それは私のだよ。

などとも言い、としよりも言うが中年以下に多いようだとのこと

あった。

「ニ」単独形がなくて、「ンナ」があるということは、軽視できないと思われる。海山町でも、ある土地人は、「ニ(ニー)」の存在を否定しながら、

△ソレワ ワシノヤンナ。

を、おもに中年の女の人が言うと言示する。

(ただし、「ワカリマスンナ。」というような言いかたはしないともいう。)

さらに、尾鷲市古江部落でも、筆者は、

○ナカナカシ イヌガ エラカッタヤンナ。

なかなか犬が賢かったんだったよ。(老男)  
という「ンナ」を聞いている。

三地とも「ンナ」という複合形のみで、しかもそれが、「ヤ(断定助動詞)」という述部を受けていることは、用法が固定的であるという点で注意すべきである。

和歌山県下の状況は、いまは全く不明である。

「全国方言資料」の東牟婁郡古座町例

○……ダレヒトリモ ソノヤマ シランネニ

だれひとりその山を知らないのだよ。(四〇一ペ)

の文末の「ニ」は、当面の「ニ」文末詞そのものであるうか。

、以上で三重県下とその外周の状況を見終わる。ついでには、北に移って、愛知県・岐阜県の状況を見る。

総体に愛知県下には「ニ(ニー)」文末詞がすこぶる盛んである。ただし、それは告知のそれであって、勧誘の表現を仕立てるものは聞かれない。これはあながち疑問のゆえではなく、おそらく勧

誘の「ニ」はおこなわれないのではないか。

ここには、告知の「ニ(ニー)」の例を二三掲げるとどめる。  
知多郡横須賀町例

○オコルヨ。オコルニ。

怒るよ。怒るよ。(中女↓同)

○ナ。テツダウダンナ。

ね。手伝うんだよ。(中女↓小男)

豊橋市の例、

○ダメダニ。ソレ イジツチャイ テオ ヒシヤイチャウニ。

駄目だよ。それいじつちやあ手をつぶしてしまうよ。

(高瀬徳雄氏「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」)

『方言研究年報』第一巻 五二ペ)

次に岐阜県下の状況は、美濃の郡上八幡や北部飛驒の白川村の状況から推量するのに、あい似たさまかと思われる。

左は、白川村平瀬の例である。

○ロッパツヤニ。

六発だよ(小男↓同)

このような告知の言いかたばかりである。

岐阜県東部の状況はいかがであらうか。また、愛知・岐阜の外がわへもなおこの「ニ(ニー)」はたどられるであらうか。滋賀県の、岐阜県寄り、東浅井郡の吉槻には告知の「ニ」を、また、甲津原では

○エキマン イコニ。ホヤホヤ。

駅まで行こうよ。そうだ、そうだ。(老女↓同)  
のような勧誘の「ニ」を聞いている。

調査をつめていけば、さらに広く興味ある事象を見いだすであろう。隠岐島五箇方言には、

○チガウ ニー。 ちがうよ。(小男↓同)

のようなことがあることが報告され、頻度が高いとある。(神部宏泰氏による。「方言研究年報」第一卷一四一―一四二)この「ニー」もまた、ここにとりあげている当の「ニ」であろうか。

問題は尽きないが、ともかく以上をあらためて大観するとき、次のように言うことができるのではないか。

告知の「ニ(ニー)」は、伊勢・志摩から尾張・三河・美濃の各地域にまたがってよくおこなわれ、あるいはさらにもっと広く、伊賀の周辺部や、大和の東辺部、あるいは近江・飛騨の一部にまで認められる。ところが、勧誘の「ニ(ニー)」は、伊勢・志摩・伊賀に盛んであって、なお伊勢・伊賀に近い近江・大和にも見られるが、尾張・三河・美濃には見られない。

一方、南三重の、紀伊領域には、転成文末詞「ニ(ニー)」の単独形は、告知・勧誘ともに認められない。こんにち、この文末詞の南限は、いちおう北牟婁郡との境にあるとしてよいであろう。ただ、前述のとおり、紀伊領域内にも「ワシノヤ シナ。」式の、告知の「シナ」複合形がおこなわれているという事実は、(それが「ニナ」だとしてのことであるが、)この地域にも、「ニ」が無縁であったのではなくて、かつてはその単独形もおこなわれていたことを物語るのではなからうか。

伊賀の場合は、これとはやや事情がちがうが、あい似た点がある。すなわち、その中心部では勧誘の「ニ」があり、告知の「ニ」は伊勢から移入したものだとの感じを伴うものらしいのに、周辺部

落には、なお丸柱の例のように告知の複合文末詞「シナ」を存している。このことは、この地域に、かつては告知の「ニ」もまたよくおこなわれていたとの推量を可能ならしめよう。「ナ」との複合形生成のためには、それ以前に「ニ」単独形の活動の歴史が想定されねばならないはずであろう。

さらに、次のようなことも考えられるのではないか。愛知・岐阜両県域には告知の「ニ(ニー)」だけおこなわれ、伊勢・志摩には告知・勧誘いずれの「ニ(ニー)」もおこなわれ、伊賀およびそれに近い近江東域には、勧誘の「ニ(ニー)」があって、告知のそれは微弱であるという、この三層状況は、告知の「ニ(ニー)」が近畿中央からまず周布したあと、勧誘の「ニ(ニー)」が伊勢・志摩に重なり及んだという歴史を物語るのではなからうか。それにしても、愛知県域や南の紀伊領域が、かなり明白な境界をなして、勧誘の「ニ」を拒んでいるのには、どんな秘密がかくされているのであろうか、大きい興味をおぼえる。

### (三) 出自について

最後に出自を考える。結論を先に述べることになるが、私は、告知・勧誘いずれの「ニ」もともに、接続助詞(おおもとは格助詞とされる)からの転成と考えている。

たとえば江島町方言では、

○ホコリガ タツニ ヤメトキー。

ほこりがたつからやめときなさい。(初老女↓娘)

のような接続法が、おもに中年以上の年層におこなわれる、この接続法は、命令表現に限って用いられるという特性をもち、やや古風

な感じのものいいをつくる。ところで、この表現が、いわゆる倒置の形をとれば、

△ヤメトキー。ホコリガ タツニー。

ということになる。このような倒置は、日常語にあっては、もはや倒置というもはばかられるほどにごくふつうにおこなわれる。

○モー ヤメトキー。モッタイナイニー。

もうやめておきなさいな。もったいないから。(青女↓兄)

○チヨット マチー。タバタバックヤニー。

ちょっと待ちなさい。食べたばかりだから。(初老女↓小女)

接続助詞「ニ」が文末に位置することがしげくおこなわれるうちに、訴えの機能をもつ文末詞化がおこり、

○ホンダケ モツテクヤ ワ。ユーワ アラヘンノヤ ニ。ソレ。

それだけ持って行ったらいいわ。湯は(ほとんど入って)ないんだよ。それには。(老女↓娘)

のような、文末詞と見てよいものに、そのまま移っていく。ことに文尾の「ニ」をしりあがりと言うようであれば、いっそう文末詞化は促進されることになる。

さて文末詞化が熟すれば、現実には連文の形で命令表現を伴わなくても自由におこなわれるようになるが、それでもなお、既述のとおり、たとえば、

○ボンボン イト ナル ニー。

おながが痛くなるよ。(中女↓幼男)

は、言外に「ヤメトキー。」を伴うのである。もとのすがたのおもかげと言うべきか。

接続助詞「ニ」は、必ずしもいわゆる順接ばかりではなく、逆接

にも働かずである。しかし、江島町方言、広く伊勢・志摩方言の転成文末詞「ニ」は、順接の「ニ」からの転成を考えやすく、逆接からの転成は考えにくいものである。一方、愛知・岐阜県下その他のものになると、この辺の事情は異なるところがあるようである。

江端義夫氏による知多市南粕谷の報告例には、

○ソナナ コト イットランデモ エーニ アンタモ オイジャ

い。そんなこと言っておらなくてもいいから、あなたもいらっしやい。(中女私作)

という順接の例とともに、

○キンノノ ヒルカラ オラシント オモッタニオ ッタダナー。

昨日の午後も、いなしと思つたのに、家にいたんだなあ。(老男↓青男)

がある。こういう逆接の「ニ」からの転成も一方ではおこりえているかもしれない。そうあって別にふしぎではないと思う。

なお、転成文末詞「ニ(ニー)」のおこなわれる地域には、接続助詞の「ニ」もみとめられるが、文末詞「ニ」のない(あるいは痕跡しかない)紀伊領域——和歌山県下はいまは問わないこととする——には、接続助詞の「ニ」もまたなさそうであることも、両者の縁の浅くないことを思わせる。

(注) 「転成文末詞」「單純感声文末詞」などの名辞については、藤原与一先生の「日本語表現法上の文末助詞——その成立と生成——」(『国語学』第十一輯)にくわしい。

## おわりに

語アクセントにおける甲乙二種の対立が、三重県と愛知県との県境で示されるということが発表されて、久しい。語アクセントにどまらず、たしかに両県の方言上のちがいはかなりに大きい。しかし、たとえば表現法上のゴザル敬語・ミエル敬語・接続助詞デ（モンデ）など、強い似かよいの存することもみとめないわけにいかないのである。本稿に転成文末詞「ニ（ニー）」をとりあげたのも、じつは両県の方言の似かよい、等質性の一つとしてというつもりからであった。ところが、等質とはいいながら、なお異質性の、上から見てきたようにみとめられる点は、特に注意しなくてはなるまい。けっきょくのところ、転成文末詞「ニ（ニー）」こそは、両県の等質性と異質性とをよく示すもの一つとされるであろう。

かつて、藤原先生が、この文末詞の、三重県域での分布状況をおたずねくださったことがあった。それは私の勉強を督促してくださるお心からであったが、そのときほとんどお答えできなかった私は、以来、いつかご報告できるようにしたいと思ってきた。本稿がその報告であるにしては、まことにおはずかしいが、いま発表の機会を与えられたさいに中間報告して、ご教示を仰ぐ次第である。

なお、本稿を成すにあたっては藤原先生からご指導を賜わった。あつくお礼申しあげます。

（昭和四六年八月七日）

— 大阪教育大学助教授 —